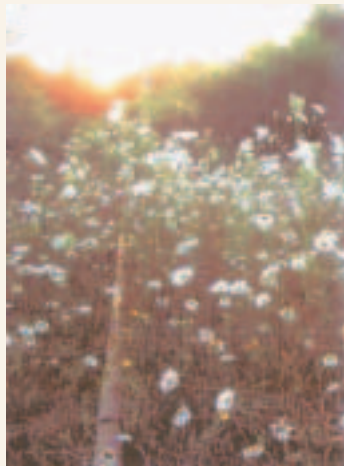


●次回予告

After Remisen #5 中田由絵と長谷川直美展



2003年7月にデンマーク、ブランデ市のレミセン・アカデミー主催の International Workshop for Visual Artists 2003に参加した中田由絵と長谷川直美が現地で制作した作品を中心に展示します。

AFTER REMISEN #5;
NAKADA YUE + HASEGAWA NAOMI
アフターレミセン #5; 中田由絵+長谷川直美

開催日 2004年1月23日(金)→2月6日(金)
12:00→18:00(日曜休館・最終日は17:00まで)
会場 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
関連企画 1月23日(金)
15:00～アーティストトーク
16:30～オープニングレセプション(18:00まで)

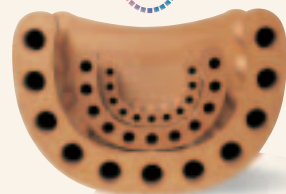
卒業制作展のお知らせ

第8回名古屋芸術大学大学院美術研究科修了制作展
会期：2004年2月24日(火)→2月29日(日)
会場：名古屋市民ギャラリー栄
Post Graduate



名古屋芸術大学
美術学部卒業制作展 大学院美術研究科修了制作展

第31回名古屋芸術大学卒業制作展
絵画科・デザイン科
会期：2004年3月2日(火)→3月7日(日)
会場：愛知県美術館ギャラリー
Painting/Design



第31回名古屋芸術大学彫刻科(現造形科)卒業制作展
会期：2004年3月2日(火)→3月7日(日)
会場：名古屋市民ギャラリー矢田
Formative Arts

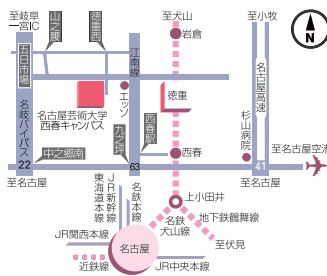
卒業制作展のお問合せ先
名古屋芸術大学美術学部・デザイン学部
Tel. 0568-24-0325(代表)

EXHIBITION 1→4月 アート&デザインセンター 展覧会スケジュール

After Remisen #5 中田由絵と長谷川直美展	1月23日(金)～2月6日(金)	BE+be
大学院研究報告会,大学院美術研究科研究制作展	2月9日(月)～2月12日(木)	BE+be+studio
造形科工芸選択コース作品展	2月13日(金)～2月19日(木)	BE+be+studio
春期休館	2月20日(金)～4月5日(月)	
デザイン学科レビュー選抜展	4月6日(火)～4月14日(水)	BE+be+studio
グループ展「蘭」	4月16日(金)～4月21日(水)	be
書道芸術演習作品展	4月23日(金)～4月28日(水)	BE

Open 12:00-18:00(最終日は17:00まで) 日曜・祝祭日休館 【入場無料】となどでもご覧いただけます。

交通のご利用
●最寄り交通機関をご利用の場合名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重駅下車西へ約1,000m徒歩15分。
●急行電車の場合は西春日井駅で普通電車に乗り換えてください。西春日井から北西2.200m徒歩25分。
西春日井からはタクシーの便もあります。
●自動車ご利用の場合
一宮インターから10分、名神小牧インターから15分、名古屋空港から10分



特集 Workshop

『ワークショップ』

「ワークショップ」という言葉が一般の人々にも親しみ深く耳にはいつてきたのは、美術館の普及活動が活発になってからです。80年代に宮城県美術館、目黒区美術館、世田谷美術館などを中心に、それぞれの館が教育普及として独自に「ワークショップ」のコンセプトや内容を明らかにし、実践活動を展開しています。3館とも実技系を卒業した学芸員が教育活動を担当していたことは、「ワークショップ」が普及した要因と無関係には思えません。その「ワークショップ」の原義は、「仕事場、作業場、工房」など、手作業の場を示しています。「ワークショップ」を社会的な問題解決のための手法として実施することが多いアメリカでは、都市計画家ローレンス・ハルプリンが住民主体の町づくりを実現する集団作業を展開したことが先駆的といわれています。個人の情報や経験を出し合い、記録し、それを実行し評価することを循環することで次の情報や経験に発展させていきます。共同作業としてのプロセスそのものが創造的なものとして捉えられています。それは1960年代の特徴的な「演劇ワークショップ」の手法からヒントを得たもので、プロデューサー、ディレクター、役者がそれぞれの役割を超えて、意見やアイデアを出し合い、新しい演劇を創造していくものです。固定的な理論や方法論を基にした修行の場ではなく、新しい理念や技術を参加者が全員で模索し、ダイナミックに訓練をしていきます。

コーディネータとしてかかわっている瀬戸市の「ノベルティ・こども創造館」で2003年の夏に私が企画実施した「ヤマムラアニメーション〜こどもずかん〜」は、アニメーション作家山村浩二さんの仕事を子どもたちがわかりやすく体感理解するための参加体験型の展覧会でした。子どもたちが設定された環境に誘われ、自分の経験をもとに展示された物にかかわっていきます。子どもが関心をもつこと、そしてその興味をさらに広げることができるように、スタッフが状況を判断した言葉を一言かけただけで、子どもの好奇心がさらに刺激されるきっかけになることがあります。スタッフと参加者の関係に「ワークショップ」の意味を照らし合わせると、どんな状況や場の設定であってもダイナミズムを伴う活動に展開する可能性がでてきます。

今日、誰もが「ワークショップ」の言葉を使ったり、また、従来の造形教室のような活動形式であっても「ワークショップ」と名づけて実施しているところなど、さまざまな「ワークショップ」が見られます。多種多様になった「ワークショップ」ですが、参加者の自主的なかかわりと共同作業としての相互作用に創造的な循環がみられることがひとつの鍵になると思います。

美術文化学科助教授
前田ちま子



「ノベルティ・こども創造館」のシンボルキャラクター(チムニー)は山村浩二さんがデザインした。



山村さんの作品のファンションの中に入り込む(クロマキー・コーナー)で、好きな作品を選んでる少年。

「ヤマムラアニメーション〜こどもずかん〜」の展示会場の前には「つちタッチ工房」があり、乗定て(土)が体験できる夏期プログラム「つちボール」を実施。

「ノベルティ・こども創造館」では30年の技術をもつ職人スタッフによる「原型」「石膏型」「鋳込み」「仕上げ」など、「ノベルティ」を体験できるワークショップがある。職人さんとともに「鋳込み」を体験している子どもたち。

※ノベルティ：瀬戸では陶磁器製の置物や装飾品を「ノベルティ」と呼び、戦後には主要な輸産品として栄えた。

「木工 はじめの一步 パチンコ台をつくろう」 「ヒミツの入り口」クレエ幼稚園

デザイン学科教授 平田哲生

昨年、年長組の子供たちに、ビー玉使ったパチンコ台をつくってもらい、みんなで遊んでもらった。木の板に機械を使って、穴を開けることだけでも楽しかったらしい。釘がうまく打てなくて、それだけでも楽しくて、ずっと釘ばかり打っていた子もいた。また、その台はちょっと工夫がこらしてあって、友達のとくつでも連結できるようにしていたため、クラスの殆ど全部をつなげた長い、長いパチンコの台ができて、昼の時間も忘れて皆、遊んでいた。それを見ていた、年少組の園児たちも遊びたいということで、再度やることになったが、人数が倍の約60人であったため、もう1つ別のプログラムを加えた。それは、自分だけの特別な入り口を作り、それらを連結することによって、ヒミツの館を作るものであった。さまざまな色を使い、子供のスケールで描かれた扉を、園児たちが、飽きずに通り抜けていた。

このワークショップの準備と当日のアシスタントには、デザイン科の1年から4年までの学生と、研究生、大学院生、交換留学生10数人が協力してくれた。彼らも、かなり楽しんでた。

犬山ってどんな色？

美術文化学科<環境創造コース専攻>3年生

◎ワークショップ:2003年12月6日

犬山市:まちづくり拠点施設「余遊邸」および魚屋町商店街一帯

◎記録展示:2003年12月15日~21日

珈琲「ふう」エントランス空間(魚屋町)

犬山は、歴史と自然風土に恵まれている。

大学からほど近い近隣地域において、その魅力ある文化資源を活用した「アートプロジェクト」を模索している美術文化学科。本年は、<環境創造コース専攻>3年生の「芸術研究演習」において、学生主体のワークショップ企画を、犬山市において実践した。

前期の授業から、現地調査や事業実施の方法論検討、6名の学生それぞれの企画書の作成を経て、実施案を検討し、今回の「犬山ってどんな色?」というワークショップ企画のプランニングが進められた。

まち歩きの見聞に満ちた楽しさを、「色」という手がかりで伝えようとする企画。6名がそれぞれ担当を決め、ある学生は商店街に何度も足を運び、約30店舗の協力を取り付けた。

「不思議の佐久島大作戦」リポート

美術学部非常勤講師 松岡 徹

今回のワークショップは、私の展覧会「どこかおかしい。」の企画のひとつとして行われた。題して「不思議の佐久島大作戦」である。佐久島の小学生10人と一緒に不思議な佐久島をパノラマ模型にしようというものだった。その佐久島の模型は、本当の佐久島とは違う見た事のない想像の世界の島なのである。制作は三回にわけて佐久島小学校で行われた。事前の準備として、佐久島のおおまかな地形を私とボランティアとで作っていた。当日子供達は真っ白い模型の上に紙粘土や竹ひごを使いながら、自分の想像力を駆使し、思い思いに島を形にしていた。「こんな物があったらおもしろいな。」「あんな物があったら素敵だな。」などと言いながら(あるいは叫びながら)楽しそうに(あるいは興奮して跳ねながら)。本当にたった10人しか子供達がいなかったか?と思う程元気でたくさんのアイデアが次から次へと溢れていった。ワークショップを通じてせっかく自分が関わるのだから、普段の授業では馬鹿馬鹿しくてできないことをしたい。できるだけ子供達の想像力を全開できるものにした。そして、それを私は絶対に手を抜かず、子供達の為にしろうなどとは思わずに自分が楽しみたい(子供達がうらやむほどに)。今では島の子は僕の大切な友だちである。

池側隆之映像個展

「a stream with bright fish」

2003年9月15日~29日
ギャラリーH.O.T/大阪市北区

作品制作における私の最大のモチベーションは、「ある場所に住まう」という感覚である。昨年より愛知県の濃尾平野のド真ん中で生活をするようになり、この極めて「平坦」なランドスケープの中に身を置くことが(好もうと好まざるとも)、今や思考することの規範となっている。地形・気象・物流・生活といった空間を構成する諸要素は、ビデオ映像とどこまでも結合と反発を繰り返し、ある流れ「a stream」となって現実と虚構の間を行き来する。映像表現におけるテーマとしての風景は、「ニュー・トポグラフィクス(新しい地形)」といった切り口により、社会性を内包しながら1970年代半ば以降重要なテーマとなり、また「クリティカル・ランドスケープ(発言する風景)」といった形と合流する。21世紀に入り、日本でも若手写真家たちによる独自の風景表現は昨今話題になっている。その流れをビデオメディアで展開しようとする動きは、日本では非常に稀である。2年ぶりのこの個展では、2つのDVD映像をシンクロさせながら壁面に投影し、約25分の時間軸、一人称で語られる「風景が発する物語」を鑑賞者に追体験していただいた。80%以上の素材を尾張エリアで撮影し、作品では小牧山が主要な役割を果たした。

デザイン学部デザイン学科 造形実験選択コース講師 池側隆之

ドロ잉・ショウ/言葉のプラネタリウム

日米ドロ잉交流展 2003年11月5日~25日
マサチューセッツ州ハンプシャー大学

パフォーマンス・ワークショップ

「The Constellating Recollections(記憶の星座化)」2003年11月13日
マサチューセッツ州マウント・ホリヨーク大学

現代の傾向が世界的な性格をもってきているにもかかわらず、国際美術展は、共有する類似性、文化的独自性、共通性あるいは作品とのかかわり合いなどを見つける刺激となる。それはまた、エネルギーや、アイデアや会話の新鮮な場を作り、世界の意義や知識を見つける場をも与えてくれる。今回、マサチューセッツ州にて日米の大学10校が参加しての交流展としてドロ잉・ショウが行われた。また、サテライト企画として、山田 亘・村田 仁によるプロジェクト「The Constellating Recollections(記憶の星座化)」も行われた。作品は、本およびプラネタリウムの制作と、それを使用するパフォーマンス、そして観客自身が本の内容と関わっていくワークショップへと展開していく。「思い出す行為」を新しい創造として再評価することを目指したこのプロジェクトは、様々な世代の人々から直接話を聞き、取材した「最も古い記憶」のストーリーを文章化し、そこから呼び起こされたイメージを絵にまとめた本を配付し、全天に言葉を投影しながら固有のストーリーという「創造」を朗読・解説というパフォーマンスによって共有しようという試みだ。参加者も2人1組になりお互いの星座を作り、固有の宇宙を完結させて相手に贈ってあげるようにデザインされていた。「個人的で繊細」という印象でありながら、現地の参加者の心にもしっかり引っかかる作品とすることができたように感じられた。

美術学部 洋画コース教授 大崎正裕

デザイン学部 非常勤講師 山田 亘

RELAY ESSAY

アートにできる告発

昨秋、「シャヒード、100の命」展を見る機会があった。これは第二次インテファダでイスラエル軍に殺戮された最初の死者100人の追悼展であるが、展覧会の展示をデザインしたパレスチナの美術家、サミール・サラメさんは、人間の命の価値を表現したかったと述べている。彼女のデザインは、犠牲者の痛ましい写真というような証拠をつきつけ、命に対する暴力性を直接的に表現するのではなく、もっと深遠な視座からなされていたように私には思われる。薄暗い展示室に棺を象徴するようなアクリルケースが一列に等間隔で並び、そのケース上の壁に死者の名前と写真を印刷した透明なシートが貼られている。“棺”の中には死者それぞれが“生きていた頃”を彷彿とさせるもの、例えば、サッカーボールやいつも持ち歩いていた母親の写真のような遺品が入っている。サラメさんはモノそのものではなく、モノの背後にあるものを見てほしいと語っている。彼女は、サッカーに夢中の無邪気な少年や母親をこよ

美系優秀

2003年11月6日~11月16日
文化フォーラム春日井・ギャラリー

学生選抜展...なんで春日井でなぜ?

そんな声があるやもしれない。

春の終わりに、文化フォーラム春日井から漠然とした企画の相談を受けた。その後、美術系大学3校の教員・設楽知昭氏(愛知県芸術大学)、小林亮介氏(名古屋造形大学)と筆者が集まって、企画趣旨を練り、出品者の選考にあたることになった。タイトルは、直球でありながら、ややシニカルな意味も込めて、〈美系優秀;ピケイユウシュウ〉とした。

筆者は、実技系の教員ではないため、各学科の先生に相談、推薦を求めて、それぞれの学生との面談を経ての人选を行なった。結果、石黒祥子・岡本健児・小野綾香・金子絵理・セクシィ(代表:佐藤嘉彦)・村田仁の5人と1組の参加となった。

展覧会への準備・展示などを通し、他校の学生との拮抗も含めた交流、自作の完成度への自覚など、極めて有意義な機会となったはずだ。そして、あらためて言っておこう。

“先生から優秀と言われたとたんに、芸術家としての大切な芽を摘まれているかもしれないので注意したい。”(「美系優秀」チラシより)

美術文化学科講師 高橋綾子

泉 秀憲 個展

2003年10月10日~11月8日
the:artist:network/ニューヨーク

昨年10月に本学洋画コース卒業生、泉秀憲さん(1983年卒業)の個展がニューヨーク市のアーティストネットワークギャラリーにおいて盛大に行われました。泉さんは東京、名古屋、最近では高知県立美術館等で作品を発表し、注目を集めてきた作家です。今般、洋画コースでは卒業生で制作活動を続けている作家に対して個展開催をバックアップしていくことにしました。その第1回の支援作家である泉さんが個展した画廊は、ニューヨークでもプロの作家が集まる場所ので、大変「目」が厳しい画廊です。それにもかかわらず大きな注目を集め、ニューヨークの作家達や美術館関係者が多数画廊を訪れました。オープニングパーティも盛大に行われ、作品も売れ、個展は成功裏に終わりました。洋画コースではこれからも日本国内のみならず、ニューヨーク、パリ、ミラノ等の海外でも卒業生の個展を支援したいと思っています。

美術学部 洋画コース教授 原田 久